言語社会研究科　博士論文要旨

著　　者　　井上　義夫
論　文　題　目　　『評伝 D.H.ロレンス』　（全 3 巻）
学位取得年月日　　2003 年 1 月 15 日

『評伝 D.H.ロレンス』全 3 巻は、D・H・ロレンスの生涯と作品をその全体に亙って闡明しようと企図する著作である。この著書の出版以前と以後に同様の目的で書かれた同程度の規模の著作としては、ケンブリッジ大学出版局版の３巻の伝記が挙げられるが、この伝記と本著作を比較するとき、本書の特徴は自ずから明らかとなる。すなわち、ケンブリッジ大学出版局版伝記が、各巻を異なる著者が執筆した事情にも起因し、ロレンスの生涯と作品の全体像が個々のデータの中に埋没した資料集のごとき外観を呈しているばかりか、そもそも第２巻を除き、ロレンス生涯の思想の動きを捉えていないのに対し、本著作は彼の思想の発展を各々の局面において鮮明に示し、そのために全体においても明瞭なロレンスの像を呈示し得ている。

およそロレンスが自ら書いた書簡のみでも、ケンブリッジ大学出版局版全集に収録されたそれは 5534 通にのぼり、同全集で約４０巻を数える作品には通例３種類ほどの遺稿があり、それも推敲や校正の類ではなく、殆ど冒頭から棹尾までが異なる草稿であるから、「資料集」としての伝記は、どのようにでも詳細に書き得るし、逆に言えばいくら詳細に書いてもすべて不完全に終わる。

『評伝 D.H.ロレンス』は，参照可能な草稿をマイクロフィルムと現物により殆どすべて参看し、その改稿過程の概要と改稿の意味を示している。このため、個々の草稿に対する評価のみならず、創作が実人生との間に密接な関係を有したこの作家の生が複眼的な視点から解明されることになった。作品は作品として，人生の出来事は出来事として個別に取扱う場合には理解できない事柄がこの方法により明らかになった。

それならば、この作家の作品はその生涯の出来事の意味を明らめるための補助材料になったかといえば、むしろ完成草稿のみを批評の対象にした従来の研究にも増して個々の作品についての批評意識は徹底しており、それぞれの作品の文学的達成度，価値が明瞭に示されている。

この評伝のもう一つの大きな特徴は、ロレンスについて語った人々の言説を、その人々の生涯と時代状況に投げ返すことにより批判的に取扱った点にある。バートランド・ラッセルを筆頭に，ロレンス死後のこの作家の評価は，各々の時期の著名人の概ね非好意的な言説に左右されることが多かった。ロレンスは４４歳を一期としてこの世を去り，ロレンスについて語った人々は概して長く生きて、その言を、　にしたから、その言説を無批判に受け入れることは、それぞれの時代に迎合するだけのことでしかない。この著作の以前にその種の批判的言説検討がなされなかったのは、一つにはロレンスが余りにも多くの人々と交際をもちすぎたため、一つには、そうするためには各々の人物について伝記的資料を検討しなければならず、それは涯しない労役を要求されるためである。この著書の不十分な点も、この第二の理由に起因し、例えば『チャタレー夫人

の恋人』のモデルになったロザリンド・ベインズの私家版の手記の存在に無知であったために、ロレンスと彼女の性的交渉につき、それらしい痕跡を作品によって示唆するにとどまった。しかし、フリーダ・ロレンス、Ｊ・Ｍ・マリやキャサリン・マンスフィールド、メイベル・ドッジ・ルーハン等、ロレンスの生涯において特に重要な意味をもつ人物は、彼らの伝記をも含めて関連資料を詳細に検討し、ロレンスに関するその言説を批判的に取上げた。

この著書の最後の特徴は、ロレンスが比較的長期に亙って滞在した場所に著者が自ら訪れ、その家屋とそれが位置する場所の雰囲気を体感した上で、この作家のその時々の気分の変化と新しい思想の展開を追体験したところにある。そのことは、ロレンスという作家が「地霊」との接触に触発されて作をなすことの多い作家であったから、作家ゆかりの地の探訪という個人的次元の楽しみとは異質の不可欠な作業であった。

生地ノッティンガム近郊イーストウッド、ロンドン南郊クロイドン、サセックス州プルバラ、コーンウォールのゼナー、イタリアのガルダ湖畔ガルニャーノ、フィレンツェとフィエーゾレ、フィアスケリーノ、カプリ島、シチリアのタオルミーナ、オーストラリアのパース郊外リースデール、シドニー郊外シロウル、ニュー・メキシコ州タオス、メキシコのチャパラ湖畔、メキシコ・シティ、オアハカ、マジョリカが主たる居住地であり、二・三の例外を除いて居住家屋をも突きとめている。

惜しむらくは、調査はすべて私費によったため、主として金銭上の理由から、スリランカには足を運ぶことができなかった。この他にもロレンス自身が訪れたローマ近郊タルクィーニアのエトルリアの墳墓、ペルージャをも訪ねた。加えて、イーストウッドに近いブリンズリのロレンスの父の生家、『虹』のモデルになったイルキストンのルイ・バロウズの家、レスター市のエマ・クレンコウの居住家屋、エスター市郊外クォーンのルイ・バロウズの家（候補家屋三軒）ノッティンガム市マパリーのアーネスト・ウィークリー宅等、殆ど確実にロレンス自身が訪ねたと推測できる家屋の所在も確かめた。ロレンスの母親が住んだシアネスの住居、フリーダ・ウィークリーの結婚当時のノッティンガム市の住居も突きとめることができた。これらは一軒を除き、それまでのどの書物にも掲載写真のなかった家屋である。

第１巻梗概

ロレンスの出生に関しては、ロレンスの死後５０年間にわたり、その父と母の出身と人となりに関わる「ロレンス神話」と呼ぶべき臆説がつきまとってきた。これを根底から覆したのはイーストウッド生まれの市井の研究者ロイ・スペンサーの『D・H・ロレンスの郷里』（１９８０）という小冊子であった。『評伝 D.H.ロレンス』は、この画期的な小冊子の真偽を資料によって確め、真実は補強しつつ、H・T・ムアを含む従来のロレンスの伝記作家の怠慢が流布させた「ロレンス神話」を打ち壊すことから始まった。出生・結婚・死亡の三種の公的文書と十年毎に行われた国勢調査が参照可能な資料のすべてと考えられたので、ロレンスの肉親につき可能な限りの証明書類を自ら集め、手に余るものについては、ロイ・スペンサー氏に二度の会見と爾後の文通により

助力を仰いだ。

他に郷土史家ロナルド・ストーラーによる炭坑での給与支払記録調査、ノッティンガム市図書館司書によるインタビューの録音、マンチェスターとノッティンガム市役所建設課に残る古い住宅地図、シアネス市図書館の地誌等も参照した。その結果、ロレンスの母の出自に関するロイ・スペンサーの新説が正確な資料に基いていることが確認できた。『評伝 D.H.ロレンス』がこれに新たにつけ加え、ケンブリッジ大学出版局版全集第１巻でもなされなかったことは、第一に、古い住居地図と国勢調査の結果を紹介することにより,ロレンスの母リディア・ビアドゥスルが生まれたマンチェスター・アンコウツのスラム街聖アンドリューズ通りの１８５１年当時の状況を再現したこと、タンク・ロウとよばれた鉄道会社雇用職員住宅の状況を推測したこと、ケント州シアネスのビアドゥスル家の現存する家屋を紹介したこと、リディアの父ジョージの転落事故のためビアドゥスル家がノッティンガム市に戻った時の住家の位置を確定し、その一帯の状況を再現したこと、が挙げられる。

第二に、証明書の入手により、ジョージ・ビアドゥスルが、長女エマの結婚に際して初めて自らの職業を「技師」と称し始め、リディアの結婚にもこの方式が踏襲されたことを発見した。

第三に、ロレンスの長兄ジョージとその息子アーネストが残したインタビューの録音テープにより、ロレンスの父方の祖父母の人となり,ロレンスの父の人柄と収入、母親リディアの人となりと生活態度を紹介した。

第四に、ノッティンガムに戻ったビアドゥスル家の家族が、退職した父親のジョージと学童を除き誰がどの程度の期間どんな職業についていたかを、国勢調査結果に基き指摘し、その職種からどの程度の収入が期待できたかを類推した。

これらを綜合すると、ロレンスの父母をめぐる「ロレンス神話」はほぼ逆転し、ロレンスの母の家系は、リディアの母方の祖父にジョン・ニュートンという名の知れた讃美歌作曲家があるとは云え（他に同姓同名の著名な讃美歌作家がいる）、この人物も含め下層の熟練労働者で占められており、他方父方の祖父母は、現存する一戸建の持家の規模に照らしても、中流階級の半ばに位置していたことが解る。母方ビアドゥスル家には、由緒ある家柄の祖先についての逸話らしきものが皆目伝わっていない事実に照らすと、この名門説はリディアが捏造したか、ロレンス自身が推測に基づいてつくったものでしかない。金銭的には恵まれない一族に、ジョン・ニュートンや素人牧師をしていたリディアの父のような人物がいて、周囲から一目置かれていたために、リディアに過度の誇りが生まれたものであろう。

ロレンスの父の結婚当時の収入は相当な額に上ったと推測できる。恐らく長期にわたりレース工場の工員をしなければならなかった長女のリディアは、この収入にも惹かれて見映えのする採炭請負人（バティ）のアーサー・ロレンスと結婚したのであろう。石炭産業は景気に左右される度合が大きい上、バティ制度自体が衰退を運命づけられた旧制度であったため、アーサーの収入は漸減し、これがリディアの失望となって夫婦仲を冷却させ、夫を家族から疎外する独得の家族形態が生まれたと思われる。

ロレンスの文学は、彼自身も知らなかったに相違ない過去を持つ母親と、母親が爪弾きにした父親が、各々精神性と官能性をその特徴として有した特異な夫婦の関係を発育の土壌とした。ロ

レンスは、二極に分解した人間の価値を自己の血の中に持ち、それが相互にどのように作用し合うかを観察し、それらにどう折合いをつけさせるかを、自らの人生と文学の課題とした。その意味で、彼の父母の血統と気質と、彼等の現実の日々は、他の文学者の場合とは比較にならない重要性をもつ。

幼い時期のロレンスに関して、従来の伝記で殆ど指摘されなかったことは、彼が中産階級の子弟のごとく育てられ, 坑夫の子供達から特異な眼で見られ、羨望と軽蔑がないまぜになっていじめの対象とされたこと。ノッティンガム・ハイスクール進学に伴い、坑夫の子供達から疎外されていた彼が、逆に真正の中産階級の子弟と交り、にも拘らずその階級から受け容れられることもなかったことである。

ハイ・スクール卒業後、ロレンスは大学には進学せず、ヘイウッド商会に勤め始めるが、寧日を経ずして次兄ウィリアムが急死し、ロレンス自身も長い病の床につく。この時期の注目すべき出来事で殆ど紹介されることがないのは、譫妄状態の彼が母親の看病を拒んだことである。枕の中にビー玉を詰め込んだと言って母親を詰ったというエピソードには、オイディプス・コンプレクスを抱いた少年の俤はなく、むしろ無意識のうちに母親を疎ましく思っている少年ロレンスの内心を窺わせる。病気回復後、ハグズ農場を経営するチェインバーズ家の一員のごとくに処遇され、足繁く出入りしてここでの生活を楽しんだのも、別段母親に気がねする必要もなかったからである。父親を忌避したことが, 母親の、手前を憚った異常と言えば異常な行為であるが、メイ・チェインバーズには父親の自慢をしているから, 無意識のなかに巣　った根深いコンプレクスとは言えない。

ロレンスが創作に手を染めるのは、チェンバーズ家の人々との幸せな生活が　特にそれがジェシーという一歳年下の女性との邪気のない交際に収収斂して行ったため彼の母親の世間的な意味合いにおける危惧のために終局を迎えたときのことである。彼の交際範囲も、ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジへの入学と卒業後のクロイドンでの就職によって除々に広まり、新しい人生体験と読書により彼の作品もイーストウッド在住時にはなかった新たな展開をとげる。『評伝 D.H.ロレンス』はその変化を刻明に辿るが、これまで指摘されなかった重要な点は、その生涯と作品との間に他のどの作家にも増して密接な関係があると云われるロレンスは、むしろ想像力の世界での創作が、実人生の出来事に先行しているという意外な事実である。

「ラテン語ノート」記載の初期の詩「野生の共有地」,『リティシア』残存草稿、『シグムンド・サガ』草稿の検討によって、そのことを明らかにした。

第１巻が対象とする時期に関して、闡明すべき大きな問題は母親の死とそれによって生じたロレンスの変化であるが、この著作は『定本詩集』序文のロレンス自身の文章と通説をくつがえし、母親に不死の病の宣告が下る以前には、ロレンスは既に母親を疎しいと思う気持を昇進させていたこと、またその看護中にも、母親を揶揄するような『回転木馬』を執筆していたこと、にも拘らずロレンスは、母親が死病に倒れた後の或る時期から、母親を自らの「恋人」に昇格させる道を選んだことを明らかにした。

また、『恋しい息子たち』に描かれ、エミール・ドラヴネを除くロレンスの主たる伝記作家が肯定している母親安楽死説を、その説の由来と諸々の証言を検討したのちに退けた。

今一つ、フリーダ・ウィークリーとの関係については、新しい諸々の伝記に基づき、オットー・グロス、マックス・ウェーバー、エルゼ・ヤッフェ等をめぐる１９世紀末から２０世紀初頭にかけてのヨーロッパの思想状況の中にフリーダという女性を置きなおして、解説した。フリーダとの出会いの時期に関しては、通説に疑義をさし挟みながら長兄ジョージの居宅とフリーダの住居の位置関係、「ピアノ」の詩の改作過程等を検討したが結論は得られなかった。

第２巻梗概

１９１２年８月５日にドイツのイッキングを出立したロレンスとフリーダは約一ヶ月後にイタリアのガルダ湖畔に到着する。第２巻は、通常「徒歩でアルプスを越えた」と言われるこの旅程を確定することから始まる。この作業により、後の「紀行文」『イタリアの薄明』が、通説のごとく、イタリア滞在中に執筆されたか或いはメモに基づくものではないことが明らかになる。

９月１８日以降、ガルダ湖畔ガルニャーノに約半年間住む間に、ロレンスは『恋しい息子たち』の最終草稿を書き上げるが、草稿『ポール・モレル』と最終草稿の詳細な比較を通じて、「ロレンス中期の思想」がこの時期に芽生え、通称『バーンス・ノヴル』と『姉と妹』初稿においてそれが具体的な形をとり始めたことを明らかにする。

１９１３年６月からロレンスとフリーダは二ヶ月間英国に滞在し、様々な人物と面識を得たのちに、８月９日以降大陸に渡り、やがてイタリアのレリチに近いフィアスケリーノに住み始める。この時期に関して最も重要なことは、『姉と妹』第２草稿の評価をめぐり庇護者であったエドワード・ガーネットとの間に疎隔が生じたことである。その出来事をレリチ滞在中のガーネット夫人の関与をも含めて詳述し、イタリアの農村に生じた変化の見分にも触発されたロレンスが、「数少ない全うな人々」とともに「汚濁と死せる観念のふ古い体制を壊し」て「生きた革命を遂行する」道に就くに至る経緯を述べる。

処女短篇集『プロシア士官』に収録された作品は、ほぼこの時期に最終稿が完成しているが、それらと草稿及び雑誌掲載作品との異同を検討し、どのような点で作者が成熟を遂げ、作品の完成度が増したかについて述べる。１９１４年６月、フリーダと結婚式を挙げるために英国に戻り、第一次世界大戦という予期せぬ大事件に遭遇して１９１９年１１月まで英国滞在を余儀なくされた５年余の歳月は、ロレンスの生涯において最も波乱に富み、同時に実り多い歳月であった。

この時期に、マリ、マンスフィールドとの交際が深まり、オットリーヌ・モレル、バートランド・ラッセルと親交を結んで貴族の世界を垣間見、E・M フォスターとも相識になり、J・M ケインズらの面識を得た。

『評伝 D.H.ロレンス』が最も詳しく扱ったのもこの時期であり、それは第一に、ロレンスのケンブリッジ大学訪問の意味を明らめることを目的としている。通説では、ケインズのパジャマ姿を見たロレンスが彼がホモセクシャルであることを見抜き、イギリスの知識階級に絶望したとされる。しかしそもそもロレンスはケンブリッジ大学訪問以前に既に、自家に滞在した E・M フォースターがホモセクシャルであることを了解しており、それ自体は特にロレンスに衝撃を与え

た様子もない。ケンブリッジ訪問後の手紙を徴しても彼がいまだ数学者ハーディに共感を抱いており、イギリスの知性に絶望した痕跡も見当らない。この通説を広め、ロレンスを誘導したのは、当時ケンブリッジ大学の好戦的雰囲気とも「使徒会」とも相容れなかったラッセルであり、ロレンスは、当時読んでいたドストエーフスキの『白痴』をイギリスの状況に重ね合わせ、デイヴィド・ガーネットとその友人フランシス・ビルルが自宅を訪ねて来た際に、若い世代のイギリスの知識人に対する絶望に増幅されて、世界に「悪」の原理が浸透しているとの確信を持った。その直後の飛行船の目撃体験は、従来殆ど重要視されなかったが、実はロレンスの生涯を二分するほどの「啓示」体験であり、この後にロレンスはラッセルに絶縁状を送ることになる。当初ロレンスに魅了され絶賛したラッセルがその自伝でファシストの烙印を捺してロレンスを貶めたのも、この時の絶縁状がもたらした衝撃と、ラッセルの講演原稿に、土足で踏みにじるような否定の言葉を大書したロレンスへの遺恨に由来する報復行為に他ならなかった。「黙示録」的世界が地上に出現したと感じた「啓示」体験によらずには、１９１７年１２月１２日、国外脱出の要件とされた祖国への忠誠宣言と兵役免除を実現すべくバターシーに赴いたロレンスが、二時間近く列に並んでいる内に踝を返して当初の方針を撤回し、英国の僻地コーンウォール滞在を決意するに至った理由が説明できない。

コーンウォール滞在中、南フランスから呼びよせたマリ、マンスフィールドとロレンス夫妻の間に起きた複雑怪異な出来事によって、「新天地」をそこに築こうとしたロレンスの願いは無惨に潰え、『恋する女』の執筆が始まる。その内容は第３巻で検討されるが、この巻では主に、『トマス・ハーディ論』『イタリアの薄明』『虹』が、執筆当時の著者の体験とその結果具体的な形をまとい始めた思想を、どのように作品に対象化し、また作品を変形したかについて分析が加えられる。『イタリアの薄明』が、主に記述された諸地方の訪問時か、或いはそれに近い時期に執筆されたとの通説がくつがえされるのも、この分析を通じてである。

第３巻梗概

この巻の主要な諸課題は、『恋する女』の執筆過程を辿ることから始まる。第一タイプ草稿と第二タイプ草稿の比較により明らかになることは、飛行船目撃がもたらした「新天新地」についての直観を指針とした前者のうち、バーキンとアーシュラの登場しない部分には殆ど変更が加えられず、作者の結婚観が、従ってバーキンとアーシュラに係る部分が大きく改められたということである。この事態を説明し得るのは、第一タイプ草稿を入手した一ヶ月のち（１９１７年４月末）に、フリーダとの関係が破綻した事実でしかあり得ない。ロレンスはその欠損を補うに、ブラヴァツキー夫人の神智学等を通じて摂取した東洋神秘思想を以てした。

以降『羽毛のある蛇』までのロレンスの創作作品には、オカルト的要素と、女性に対する男性の優位という実り少ない主題が浸浸透することになる。『恋する女』脱稿後数年間、概ね小説家としてのロレンスは低調で、長篇のエッセイと詩に優れた作品を残したと筆者が考える所以である。前者については『エアロンの杖』により、後者のエッセイについては、『ヨーロッパ史の諸

運動』『精神分析と無意識』『国民教育論』の分析によって、詩に関しては後の『鳥、獣、花々』に収録される詩群の検討によってその優位性を明らかにする。

イギリスを脱出した後ヨーロッパ滞在中のロレンスの生活に関して特に焦点を当てたのは、後にロレンスを中傷するか、或いは貶めた人物　　ノーマン・ダグラス、モーリス・マグナス、ミドルトン・マリ、キャサリン・マンスフィールド　　らの消息と彼らとロレンスの関係であり、彼らの言は誹謗中傷である場合が多く、ロレンス自身に疚しいところはなかったことを述べる。

ヨーロッパをあとにし、セイロン（現在のスリランカ）での４０日間の滞在の後、オーストラリアのシドニー郊外での居住中の伝記上の一大係争点は、果してロレンスが、「国王と帝国連盟」と呼ばれる右翼秘密組織と関係をもったか否かという問題である。このことは、同様の問題を扱った長篇小説『カンガルー』を作者が事実に基づいて書いたか、それとも主に想像力に拠ったかという、『恋しい息子たち』にも通じる創作の質の問題に関係する。ロバート・ダロックの説を、ほぼ日単位で検討した結果、ダロックの説は成立しないとの結論を提出する。

アメリカ・ニューメキシコ州タオス滞在中のロレンスに関しては、彼を呼び寄せたメイベルという女性の経歴と人となりを紹介し、その親切心と寛大さの背後に、アメリカに瀰漫する「意志」を感じとったロレンスがアメリカに対する従前の考えを改め、そのことがコーンウォールで執筆した『アメリカ古典文学研究』初稿の内容を大幅に変更させた経緯を辿る。同時に、随所に揶揄と嘲笑が見え隠れする最終稿にも、アメリカの未来に関する予言的洞察が認められることを指摘する。

メイベルの邪気から逃れ、デル・モンテ牧場を借り受けて住み始めた際に選んだ同居人、クヌーズ・メリルとカイ・ゲッチェの人物をどう評価するかは、対人関係におけるロレンスの理想を知る上で重要であるが、『評伝D.H.ロレンス』は彼らを「控え目で思義に篤く、卑劣な行為と卑劣な人間を憎む」「『旧い』美徳を備えながら、新しい芸術を志す画家」であるとし、この時の数ヶ月が、「ロレンス夫妻が他の人間と生活を共にして掛値なく幸せだった時期」であるとする。その直後、メキシコのチャパラ湖畔に滞在した折の同伴者、ウィッター・ビナーは、彼らとは好対照をなす人物であり、ビナーの『天才との旅』に記された、ロレンスが靴磨きの少年達を投獄させた話は信憑性に欠けると述べる。このアメリカ人がチャパラ湖畔でロレンス夫妻と生活を共にしたために、『羽毛ある蛇』初稿は、一見愛情深い、品性豊かな人間の外観をまとった「オウエン」批判を作品の基軸に据える小説になったのである。

タオス滞在時に改稿を終え、最終章を付け加えた『カンガルー』において、ロレンスはファシズムの過激さを「朋友（メイト）」への絶対的信頼で薄めたような運動に主人公を引き込むことに失敗した。アメリカン・インディアンとインディオの生活に接した後に書かれた『羽毛ある蛇』初稿は、各々が「孤り」の運命を全うし、しかも「協和」して生きることを可能にする、「暗い神」に導かれた宗教を形象化することを課題とした。しかし、主人公のケイトが、インディオのシプリアニと結婚することを通じて新しい宗教に参入するための秘儀は、アステカの神話にではなく、古代ユダヤ教と同時代の「異教徒」の宇宙論に立脚し、一貫性を欠く。ケイトもまた巻末で「別の人種になることも出来ないし、私の血を裏切ることもできない」と語ってメキシコを離れる決意を固める。

ロレンスがチャパラを離れ、アメリカ滞在ののちヨーロッパに戻ったのはこの小説の結末に照応しているが、『評伝D.H.ロレンス』はこの時期「カフェ・ロワイヤル」での「最後の晩餐」に象徴的に現れたフリーダ、J・M・マリ、ロレンスの関係の真実をつとめて明らかにし、後に的中することになるドイツの未来に対する予言を重視する。

アメリカ大陸を再訪したロレンスは、散文詩を思わせる「芽ぶく玉蜀黍の踊り」によって、異質な意識の領するインディアンの居住区を言葉によって再現することに成功する。暫く後の作品「ホピ族の蛇踊り」がルポルタージュの水準にとどまった背後には、ロレンスにインディアンに対する「血の信頼」を喪失させる事件が起きたと本書は指摘し、その事情は「聖モア」に描き出されていると述べる。

メキシコのオアハカに滞在して、初稿の不備を訂した『羽毛ある蛇』は、作者が第一次大戦中に到着した存在と時間についての直観をメキシコの神話を支える宇宙観に合体させることに成功した作品であり、『恋する女』以降の最も優れた長篇小説である。そのことを第７章、第１１章により確認した上で、第１７章以降、この小説が残酷さと非情をバネとし、主人公のケイトとインディオのシプリアノとの結婚に突き進んだ第２４章に到って、微妙な転調を見せ、「性」に老成した肉体と魂の浄化作用を果たさせる役割を与えたことを指摘する。しかも、ケイトとシプリアノが点した火が初期のロレンスに馴染み深い「まつゆき草」に喩えられたことは、作者の心に帰思の念が強まったことの反映である。『羽毛ある蛇』脱稿とともに病の床に伏したロレンスは、暫時タオス滞在を余儀なくされた後ヨーロッパに戻り、イタリアに住み始める。

彼の最晩年は、『羽毛ある蛇』末尾の転調に導かれた、中期とは異なる創作の日々となった。そのことを、エトルリアの故地探訪と紀行文と「死んだ男」の執筆、『チャタレー夫人の恋人』の三種類の草稿、絵画作品により明らかにする。「愛らしい貴婦人」の執筆と『定本詩集』の編集改稿過程の分析は、死期の迫ったロレンスが自己の人生をどのように振り返り、自己自身をどのように「神話化」したかを教えてくれる。ロレンスは、母親を魔女のごとき力を行使する人物として指弾し、「良夫」「良父」ではない父親像をむしろ望んで捏造し、自己自身を「中産階級」出身の母親と「肉体労働者」の、宿命的に相容れない血の産物として示したのである。